

令和元年6月14日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13154

研究課題名（和文）スポーツイベントにおける持続可能性の規定要因

研究課題名（英文）An Antecedent Variables of Sustainable Sporting Event

研究代表者

押見 大地（Oshimi, Daichi）

東海大学・体育学部・講師

研究者番号：40711205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：いかにして持続可能なスポーツイベントを作り上げていくのかというリサーチアクションのもとに、イベント主催者及びイベント参加者の2つの視点より、スポーツイベントにおける持続可能性の規定要因をインタビュー調査と質問紙調査を通じた混合研究で探った結果、安全管理の徹底や開催地域住民を巻き込んで、その地域特有の風土を味わえるようなマネジメントが重要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で研究対象としたスポーツイベントは、定期的実施可能なノン・メガスポートイベントであり、大都市ではなくとも開催可能であることから、地方における地域活性化装置の一つとして注目を集めるコンテンツである。本研究で行った持続可能なノン・メガスポートイベントの先行要因の特定は、持続可能なスポーツイベントのあり方を複数の視点から明らかにしており、今後のノン・メガスポートイベントのあり方に重要な示唆を与えている。本研究結果が、スポーツイベントを通じた持続可能な地域振興のあり方に繋がっていくことが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study explores how to create sustainable sporting events by a mixed-method approach using interview investigation and questionnaire survey for event organizers and event participants. As a results, sufficient safety event management and marketing activities for participants to experience local culture, natural features, and food were important factors for sustainable sporting event.

研究分野：スポーツ経営学

キーワード：持続可能性 スポーツイベント イベントマネジメント

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

地域活性化装置の一つとして、近年注目されているノン・メガスポーツイベント（例えば、市民マラソン大会）は、メガスポーツイベント（例えば、オリンピック）に比べ波及効果は小さいものの、定期的かつ大都市でなくとも開催できるという利点を有している。しかしながら、イベント数の増加に伴って申込者数の頭打ち傾向もみられ、今後は人気大会とそうでない大会の選別が行われていくことが予想される。つまり、いかに持続可能なスポーツイベントを作り上げていくかはイベントマネジメントの観点から極めて重要な経営課題とみなすことが出来るが、その検証が十分でないのが現状であった。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、(1) イベント主催者及び(2) イベント参加者の2つの視点により、スポーツイベントにおける持続可能性の規定要因を明らかにすることを目的とした。より具体的には、イベント主催者およびイベント参加者双方が持続可能なスポーツイベントを開催するにあたって重要と考える要因を質的調査によって特定化したうえで、量的調査を通じて実証的に検証することであった。

3. 研究の方法

本研究は、主にマラソンイベントやサイクルイベントを対象イベントとし、2つの研究対象（研究1：イベント主催者、研究2：イベント観戦者）をもとに研究を進めた。研究1では、初年度にイベントの持続可能性に与える要因を文献調査及びイベント主催者へのインタビュー調査(n=9)によって抽出し項目化した。次年度に、地方

自治体を対象とした郵送法及びe-mailによる質問紙調査を通してイベントの持続可能性に与える要因を得点化した。

研究2として、初年度に文献及びインターネット調査を介した予備調査(n=522)により、イベント選択の意思決定に与える要因を抽出したうえで、研究1の結果を踏まえて質問項目を作成した。次年度にインターネット調査(n=312)によってイベントの持続可能性に与える要因を得点化した。表1にはインタビュー調査対象者の一覧を、表2には質問紙調査の対象一覧を示す。

インタビュー調査対象の選出については、持続可能性の観点から、継続開催されているイベントであること、公的資金のみに頼るのではなく、参加費やスポンサー料等で自律的経営が出来ている大会である点等を考慮した。

質問紙調査については、研究1においてはイベント運営に携わるステークホルダーの1つである地方自治体を対象(n=1,104)とし、研究2では過去にスポーツイベントへの参加経験がある者を対象として自由記述方式による項目の収集(n=522)と、項目の得点化(n=312)をそれぞれ行った。調査は、インターネット調査によって行われた。

表1. インタビューの概要

	イベント種類 (総開催数*)	参加者数	インタビュー数 (役職)	インタビュー時間 (時期)
A	市民マラソン (57回)	約5,000人	3名 (事務局長 事務局員)	約60分 (2017年6月)
B	市民マラソン (35回)	約5,000人	1名 (事務局長)	約75分 (2017年6月)
C	市民マラソン (31回)	約11,000人	1名 (事務局長)	約120分 (2017年8月)
D	トライアスロン (33回)	約700人	1名 (事務局長)	約85分 (2018年8月)
E	市民マラソン (38回)	約13,000人	2名 (事務局員)	約110分 (2018年8月)
F	市民マラソン (34回)	約28,000人	2名 (事務局次長 事務局員)	約60分 (2018年9月)
G	サイクルイベント (30回)	約5,000人	2名 (事務局次長 事務局員)	約90分 (2018年9月)
H	サイクルイベント (9回)	約1,500人	1名 (代表取締役)	約70分 (2019年1月)
I	サイクルイベント (9回)	約1,500人	1名 (代表取締役)	約70分 (2019年1月)

*インタビュー時点

表2 運営者(自治体)を対象とした質問紙調査の概要

	回収エリア		行政区分		
	度数	パーセント	度数	パーセント	
北海道	118	10.7	都道府県	31	2.8
東北	132	12.0	指定都市	16	1.4
関東	224	20.3	中核市	44	4.0
中部	205	18.6	特例市	20	1.8
近畿	152	13.8	その他	972	88.0
中国	63	5.7	23区	21	1.9
四国	45	4.1	合計	1,104	100.0
九州	165	14.9			
合計	1,104	100.0			

4. 研究成果

表3は、予備調査を経て作成された「持続可能なスポーツイベント運営に重要な要素」について、イベントの運営者側と参加者側で分けた結果である。運営者側の調査結果は、持続可能なイベント運営において最も重要な要素として、「安全管理が行き届いた運営」が挙げられ、「開催地域住民との良好な関係づくり」や「開催地域の風土を味わえる仕組み」、「イベントマネジメントのノウハウを持った人材」、または「イベント期間外でも誘客可能な仕組みづくり」といった要素が高い値を示した。これらは、参加者の視点からも同様に重要な要素としてみなされており、特に、「安全管理が行き届いた運営」については共通して最も重要な要素となっている。また、運営者側の結果と同様、「開催地域の風土を味わえる仕組み」や「開催地域住民との良好な関係づくり」も高い値を示していることから、地元行政・警察・消防といったステークホルダーとの連携を強めることによってイベントに関する安全管理の徹底を図りつつ、地域住民とも連携しながら開催地域の風土を経験することが可能な仕組みづくりの重要性が明らかとなった。また、参加者側の特有の要素として「魅力的な観光地がある」、「自分のレベルにあったコース設定がされている」、「適正レベルのイベント参加費が設定されている」といった要素が抽出されており、特にコース設定に関する項目が高い値を示している。すなわち、「安心・安全なイベント運営」、「開催地域のイベントへの積極的関与」が整った上に、「適正なコース・値段設定」や「開催地域の風土を味わえる仕組みづくり」といったマネジメント・マーケティング要素が加わることで、持続可能なスポーツイベントが形成されていく可能性が本研究からは示唆された。

本研究の意義は以下3点が挙げられる。1つ目が持続可能性（サステナビリティ）の観点からスポーツイベントのあり方を検証した点である。持続可能性とは、社会・経済・環境の成功に伴った企業活動の持続可能な在り方を指すが（Elkington, 1997）、近年はスポーツイベントにもその考えが適用されつつあり（e.g., Chalip, 2004）、本研究結果は持続可能なスポーツイベントの構成要素とその重要度の強弱を示した点で意義があるといえる。2つ目に、二つの視点（大会主催者、大会参加者）からスポーツイベントの持続可能性を分析したことで、複眼的な観点で持続可能性の要素を検討できた点が挙げられる。

最後に、本研究の対象となったスポーツイベントは、オリンピックやサッカーの世界カップといったメガスポーツイベントではなく、市民マラソンや市民サイクルイベントといったノン・メガスポーツイベントを研究対象とした点が挙げられる。近年イベントマネジメントの観点からは、学術・実務の両面共に持続可能なイベントの在り方が問われているが、これまで実際に行われてきたスポーツイベントに関する研究は、メガスポーツイベント（例えば、オリンピック、サッカーワールドカップ）を対象としたものが大半を占めてきた（e.g., Kim et al., 2015）。しかしながら、メガスポーツイベントは単発イベントであり、持続可能性を検証する研究対象として適切とはいえない。本研究の対象となるノン・メガスポーツイベントは、定期的実施可能なイベントであり、また大都市ではなくとも開催可能（過疎地域とされる都市においても数多くのイベントが開催されている）であることから、地方における地域活性化装置の一つとして注目を集めるコンテンツである。ノン・メガスポーツイベントは、開催地域住民がイベントに積極的に関与することが可能であり、ソーシャルキャピタルの醸成などにも好影響を及ぼすとの指摘もある（Taks, 2013）。ポスト東京2020オリンピック・パラリンピックを考えた際に重要となるのは、いかにノン・メガスポーツイベントを通じて開催地域に対して持続的な経済・社会効果を生じさせるのかである。本研究結果が、スポーツマネジメント研究の学術的発展に寄与するとともに、持続可能なスポーツイベントを通じた地域活性化の一助となることを期待したい。

表3 持続可能なイベント運営に重要な要素

	運営者	参加者
開催地域の風土を味わえる仕組み	6.15 (1.03)	5.11 (1.54)
イベント期間外でも誘客可能な仕組みづくり	6.02 (1.05)	4.44 (1.45)
開催地域住民との良好な関係づくりがされている	6.33 (0.86)	5.01 (1.62)
メディアとの良好な関係	5.63 (1.08)	4.40 (1.56)
過剰サービスを行わないイベント運営がされている	5.47 (1.18)	4.53 (1.43)
イベントマネジメントのノウハウを持った人材の有無	6.06 (0.96)	4.88 (1.52)
差別化を図る取り組み	5.65 (1.19)	4.96 (1.45)
安全管理が行き届いた運営	6.41 (0.85)	5.60 (1.50)
魅力的な観光地がある		4.96 (1.45)
自分のレベルにあったコースが設定されている		5.40 (1.56)
適正レベルのイベント参加費が設定されている		5.28 (1.57)

参考文献

- Chalip, L. (2004). *Beyond impact: a general model for sport event leverage*. In Ritchie, D.A.B.W. (Ed.), *Sport Tourism: Interrelationships, Impacts and Issues*, Channel View Publications, Clevedon, pp. 226-252.
- Elkington, J. (1997). *Cannibals with forks: Triple bottom line of 21st century business*. Stoney Creek, CT: New Society Publishers.
- Kim, W., Jun, H. M., Walker, M., & Drane, D. (2015). Evaluating the perceived social impacts of hosting large-scale sport tourism events: Scale development and validation. *Tourism Management*, 48, 21-32.
- Taks, M. (2013). Social sustainability of non-mega sport events in a global world. *European Journal for Sport and Society*, 10, 121-141.

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

- 押見大地** (2018) スポーツイベントの魅力とファンづくり. *アドスタディーズ*, 67, 24-29.
山口志郎、**押見大地**、福原崇之 (2018) スポーツイベントが開催地域にもたらす効果：先行研究の検討. *体育学研究*, 63(1), 13-32.

[学会発表](計2件)

- 押見大地**、山口志郎 (2019) 参加型スポーツイベントにおけるレバレッジ戦略. 第11回スポーツマネジメント学会.
Oshimi, D., & Yamaguchi, S. (2019). Leveraging Strategies for Sustainable Non-mega Sporting Events: A Mixed-Method Approach. The 27th European Sport Management Conference.

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：山口志郎

ローマ字氏名：(YAMAGUCHI Shiro)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。